

仲間川木道周辺マングローブ林等モニタリング調査について

九州森林管理局 西表森林生態系保全センター
生態系管理指導官 山部国広

1 課題を取り上げた背景

日本最大規模のマングローブ林が広がり、観光船やエコツアーで年間約 20 万人が利用している仲間川の支流に、地元小中学生等を対象に森林環境教育の場としての利用を目的として木道を設置しました。

しかし、木道の設置箇所は、国の史跡名勝天然記念物に指定されている「仲間川天然保護区域」であることやイリオモテヤマネコ、ヤエヤマセマルハコガメなどの希少野生動物が周辺で確認されていること等から、当センターでは木道設置による周辺環境への影響の有無等についてのモニタリング調査を 6 年間行いました。

2 取組の経過

モニタリング調査は植物及び動物、木道の利用状況について行いました。また、その評価については、木道の存在に対する影響の有無を観点において行いました（表－1）。

調査項目	調査内容
植物調査 (オヒルギ群落)	生育状況、稚樹発生状況、地盤高、光環境、定点観測、塩分濃度
植物調査 (サガリバナ群落)	生育状況
動物調査	生息状況 (目撃情報、自動撮影カメラ)
木道利用状況調査	利用者数

表－1 調査項目及び調査内容

3 実行結果

(1) 植物調査について

オヒルギ群落では、台風による倒木枯損が見られましたが、平均胸高直径は 6 年間で約 0.5cm 生長しており順調に生育していることを確認できました。また、その他の調査項目では大きな変化は見られませんでした。

サガリバナ群落では、当初確認された植物全てが 6 年経過後も異常なく生育していることが確認できました。

(2) 動物調査について

動物調査では 6 年間のモニタリングにおいて、哺乳類がイリオモテヤマネコなど 3 科 3 種、鳥類がカンムリワシなど 5 科 12 種ほか多数の動物が確認されました。特に重要な種であるイリオモテヤマネコは頻繁に自動撮影カメラに撮影されており、木道上で糞をするなど活動域として利用していることが確認できました（写真－1）。



写真－1 イリオモテヤマネコ

(3) 木道利用状況調査について

木道の利用状況については、ガイド事業者等の報告から年間 500 人程度の方々に利用されていることが確認できました。また、当センターで毎年開催しているガイド講習会を受講したガイドに対して森林環境教育の啓発活動への協力等を要請してきた結果、イリオモテヤマネコに配慮した夜間使用の禁止など適正に利用されていることも確認できました。

4 考察

木道設置に伴う周辺環境への影響はなく、森林環境教育やエコツーリズムの重要な施設として木道は利用されていることから、今後もガイド講習会等を通じて木道の適切な利用推進に努めていくこととしています。また、木道は隣接する「亜熱帯樹木展示林」とマングローブ林を身近に観察できる環境教育のルートとして確立されており、仲間川保護地域全域に及ぶマングローブ林等への入り込み者を分散する役目も担っていることから、仲間川周辺環境への負荷軽減にも貢献できるものと考えています。